

## 第43回 小島三郎記念文化賞

### 馬原文彦先生 — 推薦の辞 —

おお にし よし なり  
大西克成  
Yoshinari Ohnishi

この度、馬原文彦先生の「日本紅斑熱の発見と臨床的疫学的研究」を小島三郎記念文化賞受賞候補として推薦申し上げましたところ、受賞決定の通知をいただき、大変喜んでおります。黒住医学研究振興財団理事長の中谷林太郎先生をはじめ、財団理事の方々や選考委員の先生方に心から御礼申し上げます。

それでは馬原先生の御略歴と業績を紹介させていただきます。

馬原先生は、熊本市のお生まれですが、1967年に札幌医科大学を卒業され、翌年大学院に進まれ、心臓外科で有名な和田壽郎教授の教室で研鑽され、1975年に医学博士の学位を取得されました。1976年には杏林大学医学部の助手、翌年には同学部外科学講師に昇任されました。1980年には奥様の里である徳島県阿南市郊外の新野町で馬原医院を開業され、外科だけでなく、農村における内科、小児科な

どの患者さんも診察されるようになりました。医院も軌道に乗り出しましてからは、徳島県医師会常任理事にもご就任になり、医療行政にも関与されるようになり、現在は感染症対策委員長としてご活躍中であります。

今回の受賞の対象になりました日本紅斑熱の発見は開業されて4年目の1984年5月のことであります。山で農作業をした農家の主婦が高熱と発疹で馬原医院に入院し、さらに約2週間後には、山に入ってダニに刺されて高熱と発疹で農家の主婦が来院しました。初めは一般細菌感染症を疑ってセフェム系抗生物質で治療しましたが無効で、ドキシサイクリンがよく効いたことなどから、リケッチア感染症、特に、まだ徳島県では見つかっていないツツガムシ病を疑って古典的な血清検査法である Weil-Felix 反応を行いましたところ、OXK 陰性、OX19 陰性、OX2 陽性という予想外の結果でした。これは患者血清中の凝集原と *Proteus* の O 抗原との反応で、OX2 陽性



小島三郎記念文化賞贈呈式会場風景

ということは日本ではまだ報告がない紅斑熱群リケッチア症の可能性が考えられました。早速阿南市医師会の阿南医報に3症例を発表して、近隣の医師に新しい感染症の存在を知らせました。その後徳島大学、秋田大学、国立予防衛生研究所などとの共同研究によって、翌年1985年には「わが国初の紅斑熱リケッチア感染症」として感染症学雑誌に発表されました。1987年の第61回日本感染症学会総会の教育シンポジウムで本症の臨床病名を日本紅斑熱 Japanese spotted fever とすることを提唱されました。また、同じシンポジウムで徳島大学の内田孝宏教授が患者から分離した病原体を *Rickettsia japonica* とすることを提唱され、1992年に *International Journal of Systematic Bacteriology* に発表されて、国際的にこの学名が認められました。

感染症に興味を持たれるようになった馬原先生は、持ち前の探求心と行動力で、日本紅斑熱の臨床像、治療法、疫学などについて、日本感染症学会で1994年まで毎年発表され、この疾患の概念を確立されました。また、1989年には徳島県で最初のツツガムシ病の症例を報告され、日本紅斑熱とツツガムシ病の比較研究を行われました。

国際的には、ヨーロッパ、ロシア、中国、米国の国際学会などで、Japanese spotted fever の臨床症状、治療法、疫学などについて発表し、他の国の紅斑熱群リケッチア症と比較検討を行いました。1997年には米国CDCの機関誌 *Emerging Infectious Diseases* に概要が掲載され、Japanese spotted fever は国際的に新興感染症として認識されるようになりました。

日本では、1999年に感染症法で、日本紅斑熱は第4類届出感染症に指定され、本年2007年には感

染症法改正により、第3種病原体に指定されました。また、2002年には日本内科学会雑誌において、日本内科学会創立100周年記念の特集「内科－100年のあゆみ（感染症）」で日本人の貢献として北里柴三郎、志賀潔、はじめ8人の研究者が顕彰されましたが、その中に「馬原文彦と日本紅斑熱」も取り上げられました。

2004年に自然保護グループが集団感染し、治療の遅れによる死亡例が発生しました。他の地域からも死亡例、重症例が報告され、早期診断、早期治療の必要性および日本紅斑熱に対する医療関係者への啓発の重要性が再認識されました。従来血清診断法として普及していた間接免疫蛍光抗体法では、抗体価の上昇までに日時を要しましたが、2004年藤田保健衛生大学との共同研究によって、新たな早期診断法として皮膚生検による酵素抗体法の有用性を証明されつつあります。

治療法としてテトラサイクリン系抗生剤が第一選択薬ではありますが、特に重症例の治療法としてテトラサイクリン系抗生剤とキノロン剤の併用療法を早期から行うことを提唱し、普及啓発に努めておられます。

また、日本紅斑熱の媒介動物はマダニ類ですが、衛生動物学研究者と共同研究を行うことにより、媒介動物の解明に努めておられます。

以上のように、馬原文彦先生は日本紅斑熱を発見し、その臨床的疫学的研究はリケッチア学の発展に貢献するところが顕著であり、小島三郎記念文化賞受賞候補者として最適と考えご推薦申し上げました。

馬原先生、受賞おめでとうございました。今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。